

ある男の墓碑銘

写真・文 津島修三

〈秋田市在住〉



昭和10年の第1回芥川賞は、横手市生まれの作家石川達三の『蒼茫』に贈られている。ここでは、神戸移民収容所に日本全国から集まってきた移民志願者(秋田出身者もおり、作品の中で秋田弁が飛び交う)が十日間の収容所暮らしを経てブラジル移住に旅立つまでの人間ドラマが描かれている。その『蒼茫』の冒頭にこんな一節がある。

この道が丘につき当って行き詰まったところに黄色い無装飾の大きなビルディングが建っている。後に赤松の丘を負い、右手は贅沢な尖塔をもったトア・ホテルに続き、左は黒く汚い細民街に連なる。この丘の上の是が「国立海外移民収容所」である。

『蒼茫』の中で、上流社会を象徴するトア・ホテルの存在は、移住以外には生きながらえる術がないほど食い詰めた貧農の悲哀を一層際立たせるのだった。

このトア・ホテルが、実は同郷の建築家下田菊太郎の設計によるものだったとは、達三も知る由はなかっただろう。

慶応2(1866)年に角館に生まれ少年期を秋田で過ごした菊太郎は、のちにアメリカに渡って建築の修業を積み、現地で数多くの建築を手がけ、日本人初のアメリカ建築技師免許を取得している。その実績を携えて明治2年に帰国し、日本に本場仕込みの本格的な近代建築を広める先駆者の一人になるはずであった。東京駅をつくった辰野金吾や、旧帝国ホテルの設計者として名を残すライトのように、日本の近代建築を語るときには忘れられない人物になっていたはずなのである。秋田県民にとっても、誇れる先人として多くの人々の記憶に残っていただろう。ところが、運命は彼に味方をしなかった。菊太郎が入学した工部大学校造家科の教授であった辰野金吾と折り合いが悪く、辰野を頂点とする日本近代建築の本流から疎まれて、終生傍流に甘んじなければならなかったのだ。

そして、さらに不運なことに、国内に残る菊太郎の施工例が皆無に等しい(トア・ホテルも昭和25年に火災で焼失している)ため、彼を語るよすがが乏しいものが多い。唯一、長崎市に彼が設計した旧香港上海銀行長崎支店の威風堂々たる洋風建築(上の写真が残っている。長崎市最大の洋館でもある。この建物も、昭和60年代には老朽化のため取り壊しが検討されたが、市民から取り壊し反対の声が上がり、一カ月で10万人(市内有権者の三分の二)の署名が集まり、修復保存が決まったものだ。菊太郎は、かろうじて彼の墓碑銘を残すことが出来た。長崎市民にも感謝しなければならぬ。